

クロアチア語の第二未来形と uz-接頭辞付加動詞現在形¹

三谷 恵子

はじめに

未来完了形は、発話時に後行する時点で生じる事象に先立って成立している事象を表す形式で、ヨーロッパの言語に広く見られる（英語: *will have written*; ラテン語: *scripserit*; アイスランド語: *mun hafa talað* ‘will have spoken’; フランス語: *aura vu* ‘will have seen’; イタリア語: *avrà cantato* ‘will have sung’; ルーマニア語: *va fi venit* ‘will have come’; アルメニア語: *gnacac ē linelu* ‘will have gone’; トルコ語: *ölmüş olacak* ‘will have died’）。²本論では、スラヴ語における未来完了形の消長を、とくにクロアチア語の場合について扱い、³ついでこの未来完了形の代替形としての uz-接頭辞付不完了体現在形を取り上げる。そしてこの形式の方言学的・通時的資料を検討し、さらに古チェコ語にあった vz-接頭辞付加動詞現在形との並行関係を指摘した上で、この形式が、*vьz-接頭辞のもっていた起動相の意味機能を利用した、一種の未来代替表現であったこと、また uz-接頭辞形が生じた背景には、未来完了の形式と機能の関係が認知されていない状況があったことを指摘する。

1. スラヴ語の未来完了形とクロアチア語の第二未来形

1-1.

スラヴ語の未来完了形は、be 動詞 (<*bhū-) を助動詞として、能動完了分詞（いわゆる I 分詞）と組み合わせた形 (1SG *bьdъ + -l-) をとり、⁴古教会スラヴ語 (OCS) でも、下の (1) бждеть оудоблѣль のように「未来のある時点においてすでに完了し、その結果が当該

¹ 本論は *Keiko Mitani* Uz-prefixation and the Second Future in Croatian // *Аспектуальная семантическая зона: типология систем и сценарии диахронического развития. Сборник статей V Международной конференции Комиссии по аспектологии Международного комитета славистов. Киото 13-15 ноября 2015 г.* С. 167-173. に新たな資料と考察を加えて大幅に改訂したものである。

² Lars Johanson, “Viewpoint Operator in European Languages,” in Östen Dahl, ed. *Tense and Aspect in the Languages of Europe* (Berlin-New York: Mouton de Gruyter, 2000), p. 127.

³ ここで扱う問題はセルビア語、ボスニア語、モンテネグロ語にもあてはまるが、主に正書法の統一と若干の通時的背景の違いのため、本論では単に「クロアチア語」とし、クロアチア圏の資料を中心に論じる。

⁴ Alexander M. Schenker, *The Dawn of Slavic: An Introduction to Slavic Philology* (New Haven: Yale University Press, 1995), p. 148.

の時点において関与的であるような事象」⁵を表した：

- (1) Прѣклонить сѧ и падегь егда оудоблѣль
crouch-PRS.3SG REFL CONJ fall-PRS.3SG when overcome-PTPL.M.SG
бждеть убогим⁶
AUX.3SG poor-DAT.PL [Ps.IX.31]

寄るべなき者は彼の力によって打ちくじかれ、衰え、倒れる。⁷

(直訳：彼 [悪しき者] が貧しき者たちを打ち負かすとき、[貧しき者は] 屈し倒れるだろう)

これは、発話時点 (S)、事象時点 (E)、参照時点 (R) を記号化したライヘンバッハの図式を用いると $S < E < R$ で示される。⁸

同種の用法は OCS 以後の古いスラヴ語文献にも見られる。次の例 (2) は古ロシア語、

(3) は古チェコ語の例である：

- (2) аще и грѣхы будеть кѣто сътворишь, азъ имаю
if PTCL sin-ACC.PL aux-3SG who-NOM make-PTPL.M.SG 1SG.NOM have-PRS.1SG
о томъ прѣдъ Богъмъ отвѣщати
PREP that-LOC.SG PREP God-INS answer-IPF.INF

[если даже и согрешит в чем, все равно буду я за того отвечать перед Богом]⁹

何人かが罪を犯そうとも、私がその者について神の前で答えることになるだろう。

- (3) uposlúchá-li tebe, zísal budeš bratra
listen-PRS.3SG PTCL 2SG.ACC gain-PF.PTPL.M.SG AUX.2SG brother-ACC.SG
tvého¹⁰
2SG.ACC

⁵ Horace G. Lunt, *Old Church Slavonic Grammar* (Berlin: Mouton de Gruyter, 2001), p. 114.

⁶ Vatroslav Jagić, *Psalterium Bononiense. Interpretationem veterem slavica cum aliis codicibus collatam, adnotationibus ornatam, appendicibus auctam* (Wien: Gerold & soc., 1907), p. 41.

⁷ 日本語訳は基本的に日本聖書教会口語訳旧約聖書に依拠する。

⁸ Hans Reichenbach, *Elements of Symbolic Logic* (New York: Free Press, 1966), pp. 290-295. ただしここではライヘンバッハを変更し、 $E < S$ (EがSに時間的に先行する) のように記号<を用いる。またE、S (EとSは同時) のほか記号 \supset を導入し、 $E \supset R$ (RはEの時間内に含まれる) のように用いる。

⁹ Житие Феодосия печерского. Библиотека Литературы Дервней Руси. Т. 1. [http://lib2.pushkinskijdom.ru/tabid-4872] (2015.11.30 閲覧).

¹⁰ Jan Gebauer, *Historická mluvnice jazyka českého. Díl IV Skladba* (Praha: Academia, 2007), p. 555. 原文は *Čtenie zimního času* (14世紀) より。

(兄弟が) あなたの言葉を聞き入れるなら、あなたは兄弟を得ていたことになる。

ただしこの形式は、主節で表される事象に先行する時点で完了している事象をマークするのみで、当該事象自体が発話時点に後行することは含意しない。¹¹ 次の例 (4) はミクロシッチが古ウクライナ語の例として示したものだが、ここで未来完了形によって表される事象(「銀をヴィリニウス人から買ったこと」)は、前後の文脈からしてすでに起っていることであり、S, E, R の現実での時間関係は E<S<R である：

(4) нехай теперь нам скажеть у которого будетъ Вильневца
 let now we-DAT say-PRS.3SG PREP who-GEN AUX.3SG citizen_of Villinus-GEN.SG
 купиль а мы тому Вильнивцу велимъ ему
 buy-PTPL.M.SG CONJ 1PL.NOM that-DAT.SG DAT.SG tell-PRS.1PL 3SG.DAT
 серебро заплатити.¹²
 silver-ACC.SG pay-PF.INF [Акты С.155]

この者に、どのヴィリニウス人から買ったかを言わせるつもりだ、そして私たちはそのヴィリニウス人に、銀の代金を支払わねばならぬと言うであろう。

以上から判断して、スラヴ語の未来完了形が使われる条件は[E<R]かつ[S<R]を満たしていること、ということになる。¹³

スラヴ各言語でこの形は、(A) 古い文献に見られるものの近代以後で消失した、(B) 未来形となった、(C) 現代語に残された、のいずれかの道をたどった。¹⁴ (A) は東スラヴ語、またポーランド語を除く西スラヴ語、(B) はポーランド語、スロヴェニア語、カイ言である。¹⁵ (B) のうちポーランド語では、15 世紀にすでに、動詞が不完了体の場

¹¹ Herbert Galton, *The Main Functions of the Slavic Verbal Aspect* (Skopje: Makedonska akademija na naukite i umetnostite, 1976), p. 214; Бунина И. Система времен старославянского глагола. М., 1959. С. 127.

¹² Акты относящейся къ истории западной Россіи, собранные и изданные археографическою коммисією. Т. 1. 1340-1506. СПб., 1846. С. 155.

¹³ 古ロシア語の未来完了形について同様の見解はたとえば Горикова К.В., Хабургаев Г.А. Историческая грамматика русского языка. М., 1881. С. 296.

¹⁴ Franz Miklosich, *Vergleichende Grammatik der slavischen Sprachen*, Bd.3 (Wien, 1856), p. 171, p. 241, p. 278, p. 438; Bd.4 (1868-1874), p. 807; Henrik Birnbaum, *Untersuchungen zu den Zukunftsumschreibungen mit dem Infinitiv im Altkirchen-slavischen: ein Beitrag zur historischen Verbalsyntax des Slavischen* (Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1958), p. 24, p. 261; Galton, *The Main Function*, p. 214.

¹⁵ カイ方言は、疑問代名詞に kaj を用いることからこう呼ばれるクロアチア内南スラヴ語方言。スロヴェニア語との言語連続体を形成する。カイ方言の未来形は *pisal bum/bom* ‘私は書くだろう’; Mijo Lončarić, *Kajkavsko narječje* (Zagreb: Školska knjiga, 1996), p. 109.

合、この形は不定詞を用いた未来形と競合して未来時制を表すために用いられていた：

- (5) *Gospodnye, kto będze myszkal wprxebiteze*
 Lord-VOC who-NOM AUX.3SG abide-PTPL.M.SG in_tabernacle-LOC.SG
*twoyem*¹⁶
 your-2SG.LOC

主よ。誰があなたの幕屋に宿るのでしょうか。

またスロヴェニア語でも、この形式が古くから未来完了と未来の双方の意味で用いられていたことは、スロヴェニア語最初の文法書である A. ボホリッチの *Arcticae horulae succisivae/Zimkse urice proste* (『冬の余暇の時間』) (1584) で示されている：未来形 *iest(=jaz) bom sekal*/未来完了 *kadar jest bon sekal*.¹⁷

このように (B) グループの言語では、未来完了形が、当初表していたはずの「完了・結果相」(S<E<R) の意味を失い、発話時点と参照時点が一致して事象時点に先行する関係、すなわち未来事象を表す形式 (S,R<E) へと移行した。

未来完了の意味を一義的に表す形をなくした (A) (B) グループのスラヴ語では、この機能は主として完了体現在形によって担われるようになった。

1-2.

未来完了形を保持したのはブルガリア語とクロアチア語である。ブルガリア語では、古い未来完了形 (*егда оуже вѣѣ еѣ бѣдетъ омладела* ‘その枝が柔らかになれば’ [Math. 24.32]) とならび、未来時制標識となる *ще* が付加された形 (*ще бѣда писал*) が現れ、これらは 20 世紀初頭頃まで競合した。¹⁸ しかし現在では *ще съм чел* (一人称単数男性「私は読んでいるだろう」) のように <be 動詞の未来形+I 分詞> が代表的な形とされる。¹⁹ ただし現代ブルガリア語でこの形が用いられることは稀で、未来のある言及点に先立つ未来の意味は単に未来形で表される：

- (6) *Тази мода след три години ще е преминала*
 this mode-NOM PREP three years AUX-3SG extinct-PTPL.F.SG
 3 年後にはこの流行はもうすたれてしまっているだろう。

¹⁶ *Psalterz pulawski z kodeksu pergaminowego.* (Adam Stanisław Pilińscy. Poznań, 1880). 例は Ps.14.1

¹⁷ Adam Bohorizh, *Arcticae horulae succisivae/Zimkse urice proste.* 1584. Jože Toporišič, ed. (Maribor: Založba Obzorja, 1987), 118ff.

¹⁸ Харалампиев И. Историческа граматика на българския език. Велико Търново: Фабер, 2001, С. 151.

¹⁹ Харалампиев (op.cit)はこの形がいつごろから出てきたのか特定できないとしている。

→ (6a) Тази мода след три години ще премине.²⁰

FT.PTCL-3SG extinct-PRS.3SG

これに対してクロアチア語では、古い未来完了の形式が保持されて第二未来 (futur drugi あるいは futur egzakt; 以下 F2) となった: *budem pisao/pisala* (一人称単数男性/女性) ‘私は書いているだろう’; *budemo pisali/pisale* (一人称複数男性/女性) ‘私たちは書いているだろう’。²¹ F2 が現れる統語環境は限られており、もっぱら時間・条件の従属節および関係節の中で用いられ、そのさい主節の事象は S<E である。よってこの形式が主節に現れる (7) や補文内述語として使われる (8) は非文となり、(9) は適格な文となる:

(7)*Ti budeš pročitala/čitala ovu knjigu.
2SG.NOM AUX.2SG read-PF/IPF.PTPL.F.SG this-SG.ACC book-SG.ACC

*君はこの本を読んでしまって/読んでいることだろう。

(8)*Mislio je da budeš pročitala/čitala
think-IPF.PTPL.M.SG AUX.3SG COMP AUX.2SG read-PF/IPF.PTPL

ovu knjigu.

this book-ACC.SG

*彼は君がこの本を読んでいる/読んでいることだろうと思っていた。

(9) Kad budeš imala vremena, napiši/piši mi!
when AUX.2SG have-PTPL.F.SG time-GEN write-PF/IMP.IMPR.2SG 1SG.DAT

暇があったら (手紙を) 書いてね!

この形式と統語条件を見るかぎり、F2 は OCS の未来完了形をそのまま継承しているように見えるが、じつは機能的に大きな違いがある。OCS では、未来完了形は完了体動詞から作られた²²:

(10) еда бждеть сьльгаль приходивыи
почто ми гнѣвити азыкь старцоу

²⁰ Паиов П. Българска граматика. Пловдив: Хермес, 2015, С. 159; Ницолога Р. Българска граматика. Морфология. София: Св. Климент Охридски, 2008, С. 315.

²¹ E. Barić, M. Lončarić, D. Malić, S. Pavešić, M. Peti, V. Zečević, M. Znika, *Hrvatska Gramatika. II. promijenjeno izdanje* (Zagreb: Školska knjiga, 1997), p. 241; Radoslav Katičić, *Sintaksa hrvatskoga književnog jezika* (Zagreb: HAZU, Globus, 2002), p. 202.

²² ラントは OCS にこの形が 7 例しかないとしている: Lunt, *Old Church Slavonic Grammar*, p. 114; 本文 (1) (8) に挙げたもの以外にはおそらく以下が該当すると思われる: бждеть покааль (сА); родил бждеть; бждеть съгнило; подражали бждѣмь; бждеть створиль: Helena Křížková, *Vývoj opisného futura v jazycích slovanských, zvláště v ruštině* (Praha: Státní pedagogické nakladatelství, 1960), p. 163.

why 1SG.DAT anger-INF toung-ACC.SG old_man-DAT.SG
 来訪者が嘘をついたとしてなぜ私がかの老人の舌を怒らせることがあろう。

[Supr, 239]²³

すなわち完了体の使用によって事象の完結が含意され、ここから本来の完了の意味が保証されたと言える。対して現代クロアチア語の F2 は主に不完了体から作られ、主節の事象が生起している時点で同時に成立している事象を表す。この関係は S<E, R あるいは S<[E▷R]と表される：

(11) Kupa mi novine kad se budeš vraćao.
 buy-PF.IMPR.2SG 1SG.DAT newspaper-ACC.PL when REFL AUX.2SG return-IPF.PTPL.M.SG
 帰りに（直訳：帰ってくる途中で）新聞を買ってね。
 [S=発話時点 E：家に帰る途中にある R:新聞を買う；E▷R]

次の例のように、完了体からの F2 も許容され、S<E<R を表すことができるが、実際の使用は稀である²⁴：

(12) Kad budeš došao, kupi novine.
 when AUX.2SG arrive-PF.PTPL.M.SG buy-PF.IMPR.2SG newspaper-ACC.PL
 着いたら新聞を買ってね。

(12) のような状況を表す場合には、ふつう完了体現在形が用いられる²⁵：

(13) Kad dođeš, kupi novine.
 when arrive-PF.PRS.2SG
 = (12)

以下では、F2 が表す二つの関係（未来と同時の未来：S<E,R/S<[E▷R]、もしくは未来完了：S<E<R）を一括して‘従属未来’とし、次節ではこの従属未来を表す F2 の代替形としての uz-接頭辞付き現在形について述べる。

²³ Северьянов С. Памятники старославянского языка. Т. II. Вып. 1. Супрасльская рукопись. Т. 1. СПб., 1904. С. 239.

²⁴ Barić et al. *Hrvatska gramatika*, p. 242.

²⁵ クロアチア語の完了体現在形は、東・西スラヴ語と異なり単独で未来時制を表すことはない。主節の主動詞としての用法は、語りの現在、慣習的現在、歴史的現在、否定疑問文や命令文などに限られる：Barić et al 1997; Andjelka Bulatovic, “Modality, Futurity and Dependent Tense: The Semantics of the Serbian Perfective Nonpast and Future 2” Ph.D. dissertation (Univ. of Chicago, 2008).

2. uz-接頭辞付加不完了体現在形 (uz-Vpr) 現象について

2-1.

クロアチア語の接頭辞 *uz-*²⁶ (<vъz<*uūz) は、名詞、形容詞、副詞、動詞の派生に用いられる²⁷ : ex. *uzdah* ‘ため息’, *uzmak* ‘後退’; *uzlazni* ‘上昇の’; *uzgred* ‘ついでに’; *uzrasti* ‘育つ’, *uznemiriti* ‘興奮する’。動詞接頭辞として用いられる場合、主に以下のような意味の動詞を派生させる : 空間的上昇 (*uzaći/uzići* ‘昇る’, *uspeti* ‘登る’), 反対方向の動き (*uzmicati* ‘引っ込める, 退かせる’), 起動 (*uzvikati* ‘叫び出す’, *uskipjeti* ‘沸騰する’), 強意 (*uzburkati se* ‘興奮する’), 完遂 (*uzorati* ‘全部掘る・耕す’)。²⁸

これらのほかに、*uz-*は不完了体現在形に付加されて F2 の機能的代替形を作るとされる。²⁹ たとえば :

(14) Čovjek koji bude tako pisao pročit
 man-NOM.SG who-NOM.SG AUX.3SG so write-IPF.PTPL.M.SG earn_fame-PF.INF
 će se.
 will-AUX.3SG. REFL

このような書き方をする者は名声を得るだろう。

(15) Čovjek koji tako uspiše pročit će se.
 man who so uz=write-IPF.PRS.3SG
 =(14)

ここで注意すべきは、*uspiše* (*uz-piše*) が **uspisati* という語彙化した動詞の現在形ではなく (したがって **uspisat će* や **uspisan* のような形は存在しない), (14) のように F2 が現れうる統語環境でのみ用いられる特殊な現在形であるという点である。

よって上記 (12) (13) と合わせると、クロアチア語の F2 には、動詞が完了体の場合には完了体現在形 (PPR), 不完了体の場合には *uz-Vpr* という二つの機能的代替形が認められる :

²⁶ *Uz-*は、音韻環境によって *uza-/us-/uš-/u-*という異形態で現れる。*Uz* はまた前置詞として対格形名詞句を支配し‘~に加えて’‘~に沿って’‘~とともに’といった意味を表す。

²⁷ Stjepan Babić, *Tvorba riječi u hrvatskom književnom jeziku* (Zagreb: HAZU, Globus, 2002), p. 396, p. 493; Barić et al. *Hrvatska gramatika*, p. 369, 379ff.

²⁸ Babić, *Tvorba riječi*, p. 553; Barić et al, p. 384.

²⁹ Tomo Maretić, *Gramatika i stilistika hrvatskoga ili srpskoga književnog jezika* (Zagreb: Hartman, 1899), p. 596; Стевановић М. Савремени српскохрватски језик. I. Београд: Научна књига. 1986. С. 447-448; Katičić, *Sintaksa*, p. 202, p. 262, p. 298.

《F2 と代替形》³⁰

事象関係	F2	現在形	意味
S<E<R	budeš napisao	napišeš	書いてしまっているだろう
S<[E ⇨ R]/S<E,R	budeš pisao	uspišeš	書いているところだろう

2-2.

上記のような形で文法記述の中にあるいっぽうで、現代クロアチア語で uz-Vpr の用例に出会うことは稀である。³¹ たしかにクロアチア・アカデミー版『クロアチア語辞書』では、かなりの数の uz-接頭辞付き動詞が F2 代替形として記述されている³² : *uzgovori* (<*govoriti* ‘話す’), *uzvidi* (<*vidjeti* ‘見る’), *uzdolazi* (<*dolaziti* ‘来る’), *uzbudu* (<*biti* ‘～である’)³³。いっぽう現代語のコーパスでは、ごくわずかの動詞形たとえば *ustreba* (<*trebati* ‘必要である’), *ushljedne* (<*hijeti* ‘したい, 欲する’), *uzmogne* (<*moći* ‘できる’) などが確認される程度である :

(16) Ako *ustreba* učinit će to opet. [hrWac 2.0.]³⁴
 if uz=be_in_need-PRS.3SG do-PF.INF will-AUX.3SG that-ACC.SG again
 必要があれば (彼は) それをまたするだろう。

このように周辺的な現象であるためか、uz-接頭辞付加不完了体現在形については、これまでクロアチア語学またスラヴ語学でほとんど議論されてこなかった。³⁵ しかしこの形式の出現と衰退は、従属未来を表す形式の歴史的発展、起動 (*ingressivte*) の意味と未来時制の関係、動詞形成手段としての接頭辞化、特定の接頭辞の機能と生産性といった、スラヴ語の時制アスペクト体系の基本にかかわる問題を含み、注目に価すると考えられる。

³⁰ Katičić, *Sintaksa*, p. 202 に依拠。

³¹ *Ibid.*

³² S. Musulin, S. Pavešić (eds.) *Rječnik hrvatskoga ili srpskoga jezika*. Dio XIX. 1967–1971; Dio XX. 1971–1972. (Zagreb: JAZU).

³³ マティツァ・スルプスカの辞書でも *uzjestu* (‘食べる’), *uzlazamui* (‘嘘をつく’), *uzmoću* (‘できる’), *usnutamui* (‘尋ねる’) などが F2 代替形として記載されている : Речник српскохрватскога књижевног језика. Књига шеста. (Нови сад: Матица српска, 1976).

³⁴ http://nl.ijs.si/noske/all.cgi/corp_info?corpname=hrwac (2015年8月20日閲覧)。

³⁵ たとえば Milošević (1970)はこの問題を扱っているが単独にはない : Ksenija Milošević, *Futur II i sinonimski oblici u savremenom srpskohrvatskom književnom jeziku* (Sarajevo: ANUBiH, 1970).

3. Uz-Vpr の方言的および通時的資料

3-1.

現代語ではほとんど用いられないいっぽうで、uz-Vpr の使用は方言や過去の文書の中で検証することができる。

現代クロアチア語は、セルビア語・ボスニア語・モンテネグロ語とともに、シト方言とよばれる南スラヴ語方言に依拠して形成された。クロアチアにおいては、これ以外の方言（チャ方言およびカイ方言）に古い文語伝統があったが、近代標準語の形成の過程でこれらは周辺的な要素となった。以下ではシト方言の状況について扱うが、ただし後で触れるように、カイ方言およびチャ方言の影響は、ここで論じる問題に無関係ではない。

シト方言全体として見た場合、いくつかの過去の方言記述に uz-Vpr についての言及がある。たとえば M. ペシカン（1965）はモンテネグロのシト方言変種を調査し、ここで「しばしば、とくに高齢者の間で uz 接頭辞形が現れる: *кад успрашимо, ак-успишице* ‘私たちが尋ねれば、彼・彼女が書けば’」とし、また「未来完了形はめったに現れず、現れるとすれば若い人たちの間である」と記述している。³⁶ ペシカンが調査した時代に「高齢」であった話者とはおおそ 19 世紀末から 20 世紀初頭頃に生まれこの方言を獲得した人々だろう。ここからは uz-Vpr が F2 の代替形として 20 世紀始め頃には機能していた状況が推測される。また A. ペツォ（2007）も西ヘルツェゴヴィナ方言に関する記述の中で *uščuvaš (<čuva)* ‘you uz-keep (君は保つだろう)’ のような形を挙げている。³⁷

これらの報告から想起されるのは、ヴーク・カラジッチ（1787-1864）の最初の文法書 *Pismenica*（1814）の記述である。ヴークはこの中で、*bivati* (be 動詞の多回形) を例に動詞の変化形を示しているが、ここに uz-接頭辞のついた形を‘条件法未来形’として組み入れている: *ако узбивам, узбиваш* ‘もし私が～（である uz+be-PRS.1SG）なら、あなたが～（である uz+be-PRS.2SG）なら’。³⁸ よく知られているように、ヴークの文法はその多くを

³⁶ *Пешикан М. Староцрногорски средњокатунски и љешански говори. Београд: Институт за српскохрватски језик, 1965. С. 202.*

³⁷ *Asim Peco, Govori zapadne Hercegovine. Josip Baotić, (ed.) Izabrana djela I-IV. Knj. II (Sarajevo: Bosansko filološko društvo, 2007), pp. 329-330.*

³⁸ *Караџић В.С. Писменица сербскога језика по говору простога народа. Веч: Штампарија Јована Шнирера. 1814. 59ff.*

自分の家族の出身地方言であるシト方言南部に依拠している。³⁹ このことを、上記の方言記述と合わせると、かかる形式が少なくとも 20 世紀始め頃までのシト方言とりわけその南部変種で、一定以上の頻度で用いられていたというかなり確かな推論を導くことができる。

3-2.

Uz-VPR を動詞の変化形として扱う立場は、ヴークと同時代、あるいはそれ以後の 19 世紀クロアチア語文法にも見られる。クロアチア 19 世紀後半の標準語化プロセスは、クロアチアの文語伝統をより重視しようという、いわゆる‘ザグレブ派’と、Đ. ダニチッチ (1825-1882) に代表されヴークの文法に統合しようとする‘ヴーク派’とのせめぎあいの中にあったが、⁴⁰ 後者の一人とされる P. ブドマニ (1835-1914) の『セルボ・クロアチア語文法』(1867) にも、従属節中の‘未来形’として *kad uzljubim* (*uz-ljubim* < *ljubiti* ‘好む’), *ustijem* (*uz-htijem* < *htjeti* ‘欲する’) などが示されている。⁴¹ ヴーク派の文法に現れるこれらの形は、たんにヴークの影響によるとも想像されうるが、しかし実際には、ヴーク派だけではなく、ザグレブ派の代表格である A. マジュラニッチ (1805-1888) や V. バブキッチ (1812-1875) らの文法書にも、同じく *uz-Vpr* 形が挙げられている。

たとえばマジュラニッチの『実務学校およびギムナジウムのためのクロアチア語文法』では、時や条件の従属節の中で用いられる動詞の形式について、「不定法第 1 未来 (*buduće I za neizvjestnost*)」として *kad uzbudem* のような形をあげている。⁴² またバブキッチによる『イリリア語文法』(1854) でも、*ako* (もし), *kad* (~のとき), *dok* (~の間) などによって導かれる従属節の中の形式を「条件法未来」の形式として *ustrēbam* (*ustrebam*), *uzvidim*, *uzoram* (<*uz-orati* ‘耕す’), *uzpijem* (<*uz-piti* ‘飲む’), *uzradim* (<*uz-raditi* ‘働く’) などを示している。⁴³ なおブドマニ、マジュラニッチ、バブキッチらの文法ではいずれも、F2 形は「未来完了形」(あるいは第二未来形)とされている。

³⁹ *Beluš, A.* 1998. Вукова борба за народни и књижевни језик. Расправе и предавања // Вукова борба за народни и књижевни језик. Расправе и предавања. 1998. 55ff.; *uz-Vpr* については Barbara Oczkova, *Hrvati i njihov jezik. Iz povijesti kodificiranja književnojezične norme*. N. Pintarić. Prijevod s poljskoga jezika (Zagreb: Školska knjiga, 2010), p. 28.

⁴⁰ Sanda Ham, *Povijest hrvatskih gramatika* (Zagreb: Globus, 2006), 67ff.

⁴¹ Pietro Budmani, *Gramatica della lingua Serbo-Croata (Illirica)* (Vienna, 1867), p. 105.

⁴² Antun Mažuranić, *Slovnica Hèrvatska za gimnazije i realne škole. Dio.I. Rečoslovje*. Četverto izdanje (Zagreb: Fr. Župan, 1869), p. 79.

⁴³ Věkoslav Babukić, *Ilirska Slovnica* (Zagreb: Tiskarnica dra L.Gaja, 1854), 272ff.

つまり彼らの扱いは、S<E<R の関係を表す形式は F2, いっぽう S<[E<R]/S<E,R の関係を表す形式は uz-Vpr 形として、これら二つの形式が区別されていたことになる。

クロアチア語の文法記述を過去に遡ると、uz-Vpr 形は 19 世紀よりさらに古い時代にも見いだすことができる。18 世紀の端的な例としては M. レルコヴィッチ (1732-1798) の『新スラヴォニアドイツ語文法』(1767 年)⁴⁴、さらに古く L. シトヴィッチ (1682-1729) による『ラテン-イリリア文法』(1713) が挙げられる。レルコヴィッチは、バブキッチやマジュラニッチに先立って、uz-Vpr 形を動詞の条件法としてパラダイムの中に加えている: *Ako ja budem, ili uz budem kod kuche* ‘もし私が家にいれば’; *Ako ja ne mogu, ili uz mogu dochi, nemojtemi zamiriti* ‘もしも私が来られなくても怒らないでください’。⁴⁵ レルコヴィッチに半世紀先立つシトヴィッチもやはり動詞の接続法未来形として *kad uzmirim* (<uz-miriti 静まる) のような uz-接頭辞形を挙げている。⁴⁶

こうした記述をさらに過去にたどると、J. ミカリヤ (1601-1654) の『イタリア語簡易文法あるいはラテン語入門のための小文法』に至る。ここでミカリヤは ‘来るべき時を表す法’ の形として *kad ja uzvidim, kad budem vidio* を挙げ、前者は未来、後者は未来完了としている。⁴⁷ この、uz-接頭辞形と F2 形を区別して二つの異なる従属未来形を認める立場は、後のブドマニ、マジュラニッチ、バブキッチらと同じものであり、彼らの文法記述がミカリヤ以来の伝統の上にあったことが推測される。

3-3.

F2 の機能的代替形としての uz-Vpr は、上記のように 1600 年代の文法書にまで遡って確認される。いっぽう書かれた文献からこの形を探すと、13 世紀頃の文献からそれらしき例が散見される: «колико възлюбиши прѣбъгити да си прѣбудеши» ‘ここにとどまりたいと思う限りここにとどまるがよい’。⁴⁸ ここで *възлюбиши* ‘～したいと思う’ は主節の事象 *прѣбудеши* が起こる時点で生じている事象を表しており (S<[E<R]), 従属未来を表す

⁴⁴ M. レルコヴィッチはクロアチア北部スラヴォニア出身の軍人で、退役後人文学に傾倒し、主にスラヴォニアに駐屯するオーストリア軍兵士らのためにこの文法書を書いたとされる: Ham, *Povijest hrvatskih gramatika*, pp. 33–38.

⁴⁵ Matija Relković, *Nova slavonska, i nimacska grammatika. Neue slavonsische und deutsche Grammatik* (Zagreb: Anton Jandera, 1767), pp. 342-343.

⁴⁶ Laurentis de Gliubuschi. *Grammatica latino-illyrica*. 1713, p. 77.

⁴⁷ Jakov Mikalja, *Gramatika talijanska u kratko ili Kratak nauk za naučiti latinski jezik*. in *Blago jezika slovinskoga (1649./1651). Transkripcija i leksikologija interpretacija* (Zagreb: Institut za hrvatski jezik i jezikoslovje, 2011), p. 913. ミカリヤの文法はクロアチア語で書かれたロマンス語の文法概説で、上記の形はそれぞれ *Quando io vedrò, hauerò veduto* に対応するとされている。

⁴⁸ Franz Miklosich, *Monumenta Serbica* (Vienna, 1858), p. 22.

機能を果たしているように見える。ただしこの動詞は古教会スラヴ語でも‘～したい’の意味で使われており（*възлюби дѣша моѣ възжелѣти: сждобѣ твоихъ* ‘私の魂はあなたの掟を慕っていたいのです’ [Ps.118.20]⁴⁹）すでに語彙化した動詞の現在形であるとも解釈できる。じっさい *uz-VPR* を、*uz*-接頭辞のついた動詞の現在形と明確に区別できるかは問題ではあるが、以下では（ZIMA 1887）⁵⁰ やアカデミー版辞書の記述を参照しながら、少なくとも従属未来という統語条件を満たし、もとの動詞が不完了体で、通常理解できる *uz*-接頭辞付き動詞が存在しないような場合を該当するケースと判断し、14 世紀から 17 世紀までの例を挙げる。

例 (17) (18) はいわゆる実用文書、(19) は翻訳、(20) (21) (22) はオリジナルの文学作品の例である：

(17) *штоцо годѣ узговоре одѣ наше стране*
whatever uz=speak.PRS.3PL PREP our-GEN.F.SG side-GEN.SG
*вашои милости*⁵¹
your-DAT.F.SG grace-DAT.SG

殿下に私ども（の者）が何を言おうと

(18) *ако ли узимаю кою прѹ саси*
if PTCL uz=have.PRS.3PL INDEF.PRN.ACC.SG. quarrel-ACC.SG Saxons-NOM.PL
*з дубровчани*⁵²
PREP Dubrovnik _citizens-INS.PL

もしザクセン人たちがドゥブロヴニク人たちと争うことがあれば

(19) *немои-се бояти немои сумнити ако тии добро*
ADV REF be_afraid_of-INF ADV doubt-INF if 2SG.NOM well
*узвиерунешь истинога бога*⁵³
uz=believe-PRS.2SG true-GEN.M.SG God-GEN

真なる神をよく信ずるなら、恐ることも疑うこともあつてはなりません。

(20) *I ако не uzbude stvar [...], за то не imam*
CONJ if NEG uz=be-FUT.3SG thing.NOM.SG PREP that-ACC NEG have-PRS.1SG

⁴⁹ *Северьянов С.Н.* Синайская псалтырь. Глаголический памятник XI в. Пг., 1922. С. 155.

⁵⁰ Luka Zima, *Nekeje, većinom Sintaktične razlike između čakavštine, kajkavštine i štokavštine* (Zagreb: JAZU, 1887), pp. 256-264.

⁵¹ Miklosich, *Monumenta Serbica*, p. 536 (例は 1487 年の書状).

⁵² *Monumenta Serbica*, p. 205 (例は 1387 年の書状).

⁵³ *Историја од св. Турђа // Речетар М.* Либро од мнозијех разлога. Дубровачки ћирилицки зборник од г. 1520. (Сремски Карловци: Српска манастирска штампарија, 1926), С. 67.

bit ja kriv nego vi⁵⁴

be-INF 1SG.NOM guilty-M.SG.NOM CONJ 2SG.NOM

物事がそのようにならなくとも、その科を負うべきは私ではなくあなただ。

- (21) ali, ako ga ona ušćeka, nastaće se
 CONJ if him-GEN.SG 3SG.F uz-wait.IPF.PRS.3SG become-IPF.INF-AUX.3SG REFL
 mrazna i naga⁵⁵
 cold-F.SG CONJ bare-F.SG

だがもし彼女（許嫁）が彼を待とうとするなら、飢えと寒さに見舞われるだろう。

- (22) Koji ovako uzćine, biti će s Isusom u kraljstvu⁵⁶
 who-PL this uz=do-IPF.PRS.3PL be-INF AUX.3SG PREP Jesus-INS PREP kingdom-LOC.SG
 nebeskom
 heavenly-LOC.SG

かくのごとくふるまう者たちはイエスとともに天の園にあるだろう。

このように、異なるジャンルの文書に uz-Vpr 形が現れることから、中世から近代までのクロアチアの書き手たちにこの形式が少なからず用いられていたことが示唆される。こうした用法が、先に見た文法家たちの記述に反映されたことは明らかと考えられる。またこれらの書き手たちの依拠した言語がシト方言であることから、uz-Vpr が古いシト方言の特徴であり、ヴークの文法やペシカンらの方言記述に現れる uz-Vpr 現象もここに結びつけられると推測される。

4. uz-Vpr と古チェコ語の vz-接頭辞付加現象、それらが意味するもの

4-1.

スラヴ語の接頭辞付加は、基本的に語彙派生の操作であり、時制など動詞文法範疇の区別のために用いられる手段ではない。この通スラヴ的文法原則からすると uz-Vpr 現象はあきらかに変則的である。このことをふまえ、以下では uz-Vpr 現象が出現した背後にあったものについて考える。

まずこの変則的な形式が出現した先行要件として、F2 の未発達な状況が指摘できるだ

⁵⁴ Marin Držić, *Pjesni razlike*, in *Klasici hrvatske književnosti. Pjesništvo*. Hrvatska književnost u CD-ROM-u (Zagreb: Bulaja Naklada, 2000), p. 3.

⁵⁵ Ivan Gundulić, *Osman*, in *Klasici hrvatske književnosti. Epika. Romani. Novele*. Hrvatska književnost u CD-ROM-u (Zagreb: Bulaja Naklada, 1999), p. 130.

⁵⁶ Musulin, Pavešić, *Rječnik*. XX. p. 60.

ろう。

F2 形式の意味が 20 世紀初頭頃までのクロアチア語でどう認知されていたかは、過去の文法書の記述によっておおむね推察することができる。すでに言及したように、F2 形はいくつかの文法書では、従属節に現れる未来完了形とされていたが、こうした扱いが広く認められていたわけではない。じっさい、クロアチア語最初の文法とされる B.カシッチ (1575-1650) の『イリリア語文法』(1604) では、この形式がしばしば *bude-*+不定詞 (*budem učiniti*)⁵⁷ と混同されるとある。この記述が示唆するのは、これら 2 つの形式が未来事象を表す形 (単なる未来および従属未来) として競合していた状況であり、そしてまた未来時制の形式も一義的に定まっていなかったという状況でもあろう。クロアチアには古くからチャ方言、後にはカイ方言の標準文語の伝統があり、チャ方言では *bude-*+不定詞が未来形として広く用いられる一方で F2 形はそもそもあまり用いられず、またカイ方言では F2 形は古くより一義的に未来形であった。これらの方言の影響はシト方言のさまざまな時代とジャンルの書き手たちに異なる程度で影響していた。つまりクロアチア語内に長く、未来時制を表す形式として *bude-*+不定詞、*bude-*+I 分詞形すなわち F2 形、そしてまた現代標準語の形式となった *htjeti*+不定詞という複数の形式が競合していた。カシッチの記述は、このような錯綜した状況の一端を示していると考えられる。

カシッチから 250 年以上を経たヴェーベル・トカルチェヴィッチ (1825-1889) の『初等ギムナジウムのためのイリリア語文法』では、*be* 動詞の現在形+I 分詞の迂言形 (*učinila sam* ‘私はやった’) つまり現代語の過去形が未来完了形とされている。⁵⁸ クロアチア語標準形をヴーク派の基準に統一した T. マレティッチ (1854-1938) 『クロアチア語文法』の第一版でさえ「第二未来形」としてまず示されているのは *htjedbudem*, *mogduden*, *imadbudem* といった古い形であり、*budem* + I 分詞は迂言的過去形とされている。⁵⁹

このように、F2 は形式こそ古いスラヴ語から継承したものであるが、比較的近年に至るまで形式と機能の関係が話者たちに明確に認知されておらず、その意味で未熟な文法形式であったといえる。

従属未来の意味を一義的に表す形式が存在しない中、シト方言ではさまざまな形—現

⁵⁷ Bartol Kašić, *Institutiones linguae Illyricae*. Rome.1604. M. Znika. Bartol Kašić: *Osnove ilirskoga jezika u dvije knjige* (Zagreb: Institut za hrvatski jezik i jezikoslovlje, 2002), p. 203.

⁵⁸ Adolf Weber Tkalčević, *Skladnja ilirskoga jezika za niže gimnazije* (Beč: Naklada školskij knjiga, 1862), p. 98. なおこの文法書でも *uz-Vpr* 形が従属未来形として挙げられている: *Ako tako uzradimo, onda...* ‘if we uz-do so, then,...’ p. 96.

⁵⁹ Maretić, *Gramatika*, p. 614.

在形, 過去形, 未来形—が用いられていた。⁶⁰ このうち, 完了体現在形は, 完了体自体がもつ‘限界性 (boundedness)’⁶¹ のために, 発話時点より後行するある時点で完結している事象を含意する (S<E<R)。この属性のために完了体現在形は未来完了形の代替形式として適格なものとなり, 事実先の (13) のような形で完了体現在が未来完了の意味で用いられてきた。いっぽう従属未来の事象が, 主節の事象と同時あるいはその背景として成立している場合 (すなわち S<E,R または S<[E<R]) には, E と R の同期性という点からして, 不完了体のアスペクト特性が適切なものとして求められるだろう。じっさい *Ako uči*_{IPF.PRS.3SG}, *uspjet će*. ‘もし (彼・彼女が) 勉強すれば, 成功するだろう’のような言い方は可能である (cf. ブルガリア語: *Аз като пѐя, ти ще плачеш*. ‘私が歌えばあなたは泣くだろう’⁶²)。ただしこの場合には発話時点で事象が生起している (S,E<R) という解釈も可能であり, S, E, R の時間関係は曖昧である。この曖昧性を回避するための手段として利用されたのが, uz-接頭辞付加という手段だったのではないだろうか。

接頭辞 uz-は多くの意味機能をもつが, その一つとして起動 (ingressive) の動作様相形成がある。すなわち派生元の不完了体が, ある事象 E (が生起している状態) を表すのに対して, uz-接頭辞付加はその状態への移行 (¬E→E : *uzvikati* ‘叫び出す’ = ‘叫んでいない状態→叫んでいる状態’, *uskipjeti* ‘煮立つ’ = ‘煮立っていない状態’→‘煮立った状態’) を表す。そしてこの uz-接頭辞付加という操作は同時に, 事象 E が成立した後の状態が継続していることを語用論的に含意するだろう。よってこれを従属未来の統語環境に用いれば, 発話時点に後行して起こる事象 R の時点で, これに先立って発生しその状態が持続している事象 E を表すことができる (S,E<R あるいは S<[E<R])。これが uzVpr 現象の発生ではなかったかと推測される。

4-2.

uz-接頭辞付加が uz-のもつ起動の意味から発したという推測を支持する根拠として, 古チェコ語にあった vz-接頭辞付加の類似したケースを挙げることができる。現代チェコ語には移動動詞に接頭辞 po-をつけて未来の意味を表す用法がある (*poletím<letím*, *poběžim<běžim*) が, これと並んで古チェコ語には, 不完了体現在形に vz-接頭辞を付加して発話に後行して起こる事象を表す用法があったとされる。⁶³ 次の (23) ~ (25) は

⁶⁰ Zima, *Ňekoje*, 256ff.

⁶¹ Östen Dahl, *Tense and Aspect Systems* (Oxford, UK: Basil Blackwell, 1985).

⁶² Bernard Comrie, *Aspect: An introduction to the study of verbal aspect and related problems* (Cambridge [u.a.]: Cambridge University Press, 2001), p. 69.

⁶³ Arnošt Lamprecht, Dušan Šlosar, Jaroslav Bauer, *Historická mluvnice češtiny* (Praha: Státní pedagogické

古チェコ語の詩篇訳, (23b) ~ (25b) はそれぞれ, クラリツェ聖書の対応箇所である。

(23) Bůh súdce spavedlný silný a pokojný
 God-NOM judge-NOM righteous-NOM.M.SG mighty-NOM.M.SG. CONJ calm-NOM.M.SG
 či sě vzněvá na každé dni⁶⁴ (Ps. 7.12)
 or-CONJ REFL vz=be_angry.PRS.SG PREP every-ACC.PL day-ACC.PL

(23b) Bůh jest soudce spravedlivý, Bůh silný hněvá se na bezbožného každý den.
 神は公明正大なる裁き手, 温和なれど日々怒りを現される。

(24) Hospodine kdož vzbydlí v stanu tvém⁶⁵
 Lord-VOC who-NOM vz=live.IPF.PRS.3SG prep tabernacle-LOC.SG your-LOC.SG

(24b) Hospodine, kdo bude přebývati v stánku tvém? (Ps.14.1)
 主よ, 誰があなたの幕屋に宿るのでしょうか。

(25) Vzvyší tě bože můj král'u i
 vz=exalt-IPF.PRS.1SG 2SG.ACC God-VOC my-NOM.SG king-VOC CONJ
 vzblahaju jménu tvému na věky...⁶⁶ (Ps.144.1-2)
 vz=eulogize.PRS.1SG name-DAT.SG your-DAT.N.SG PREP eternities-ACC.PL

(25b) Vyvyšovati tě budu, Bože můj králi, a dobrořečiti jménu tvému na věky věků.
 わが神, 王よ, わたしはあなたをあがめ, 世々かぎりなく御名を賞賛します。

これらの例では sě vzněvá, vzbydlí, vzblahaju (<vz+blahá- ‘賞賛する’) といった vz-接頭辞付きの動詞現在形が用いられ, 発話時点に後行する時点で生起するかあるいは生起することが想定される事象を表している。⁶⁷ ここにはあきらかに, クロアチア語の uz-Vpr 現象と同じ, vz-接頭辞が表す起動相の意味を未来標識に転用する操作を認めることができるだろう。ただしクラリツェ聖書の対応箇所は, (23b) (24b) では接頭辞のない hněvá, および合成未来形 bude přebývati, (25b) では budu dobrořečiti と語彙を変え, 合成未来形を用いている。このように, vz-接頭辞付加による未来代替表現は古チェコ語の初期に限られた現象と考えられる。

nakl., 1986), p. 195; František Kopečný, “Zur Entstehung der Futurbedeutung beim perfektiven Präsens im Slavischen,” *Scando slavica*, 1962, 8, p. 177; Dušan Šlosar, “Vývoj funkcí slovesného prefixu vz- v češtině,” *Sborník prací filozofické fakulty brněnské univerzity*. A22/23, 1974.75. pp. 37-42.

⁶⁴ Josef Vintr, *Die älteste tschechische Psalterübersetzung* (Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften, 1986), p. 59.

⁶⁵ *Ibid.* p. 67.

⁶⁶ *Ibid.* p. 262.

⁶⁷ Kopečný, *Zur Entstehung*, p. 177.

古チェコ語の vz-接頭辞付加をコペチニーらは「未来形」とし、これが早くに消失した理由を、分析的未来形が未来時制の文法形式として発達したことに関連付けている。クロアチア語の場合には、uz-Vpr は従属未来として現れ、この用法は完全に消失せずに今日までわずかに残ったが、その衰退には、やはり標準語の確率とともに F2 の形と用法が普及したことが考えられる。また uz-/vz-接頭辞自体の生産性の変化もこの形式の衰退に関係付けられるだろう。古教会スラヴ語では **вѣз-**はもっとも生産的な接頭辞の一つであり、この状況は古いスラヴ語、如実には古チェコ語の詩篇訳にも反映されていた。しかし ***вѣз-**接頭辞の表していた起動相は、roz-/raz-や za-など別の接頭辞によって表されるように変化し、***вѣз-**は動詞派生に関して生産的ではない、周辺的な接頭辞となった。⁶⁸ さらに、原理的な問題として、本来は動作様相の語形成—そのうちのいくつかは動作様相の意味を失っていわゆる‘空の’アスペクト接頭辞となる—である接頭辞付加という操作が、動詞の時制パラダイムの代替形となるという変則性が、最終的に、このような文法原理をもたないスラヴ語において排除されるに至ったのではないかと考えられる。

5. まとめ

本論ではクロアチア語の F2 とその代替形について考察し、この形式で表される従属未来に本来の未来完了 (S<E<R) と、未来のある事象と同時に生じる事象を表す用法 (S<E,R または S<[E<R]) の場合があること、前者には完了体現在形が、後者には uz-Vpr 形があることを確認した。そしてこの uz-Vpr 現象が過去の文献と文法記述から検証できる実態のあるものであったこと、かかる形式が生じた背景には F2 が未発達であった状況と、uz-接頭辞の、起動の動作様相の意味が影響していたと考えた。

uz-Vpr 現象と類似した現象がチェコ語にもあったことの示唆は大きいと言えるだろう。起動相の意味を表す ***вѣз-**接頭辞付加が、未来形や従属未来の代替形になりえたことは、未来形の形式が確定していなかった古いスラヴ諸語で、起動と意味的に隣接する‘開始’を表す ***-ѣн-**動詞 (nače-, počē-‘始める’) が未来の助動詞として用いられたという事実からも支持されるだろう。本論では uz-Vpr 現象をシト方言の古い特徴の一つと推測したが、チェコ語にも類似の現象があり、これが起動の意味を表す接頭辞 ***вѣз-**の作用と結びつくなら、古い時代のその他のスラヴ語方言の ***вѣз-**にも同種の使い方があった可能性が示唆される。OCS での **вѣз** 接頭辞の用法も含めとくに初期スラヴ語の状況を今一度見直す必要があると考えられる。

⁶⁸ Šlosar, Vývoj funkcí, p. 40.

略号 以下を例文グロスで使用した。

1	一人称	CONJ	接続詞	GEN	生格	IPF	不完了体	PF	完了体	PTCL	助詞	
2	二人称	COMP	補文標識	IMPR	命令形	LOC	前置格	PL	複数	PTPL	分詞	
3	三人称	DAT	与格	INDEF	不定	M	男性	PREP	前置詞	SG	単数	
	ACC	对格	F	女性	INF	不定詞	NOM	主格	PRN	人称代名詞	VOC	呼格
	AUX	助詞	FUT	未来	INS	造格	NEG	否定辞	PRS	現在		

Сложное будущее II и глагольная форма с префиксом *uz-* в хорватском языке

МИТАНИ Кэйко

Настоящая работа посвящается синтаксическим и семантическим свойствам сложного будущего II в славянских языках, в том числе в хорватском. В связи с этой формой в работе также рассматривается своеобразное употребление префикса *uz-*, формирующего функциональную альтернативу для будущего II в хорватском языке.

Сложное будущее II в старых славянских языках образовалось от действительного причастия прошедшего времени (причастия на -л) с будущей формой вспомогательного глагола **byti: *bǫdǫ pisalъ*. В старославянском языке данная форма обозначала действие, предшествующее другому действию в будущем.

Наблюдаемая форма встречалась также в древневосточнославянском и старочешском языках, но в процессе изменения этих языков она в них исчезла; в польском и словенском форма превратилась в средство обозначения абсолютного будущего. В отличие от этих славянских языков, хорватский сохранил данную форму в качестве будущего второго (*futur drugi* или *futur egzakt*, далее F2), использование которого синтаксически ограничено в придаточных предложениях условия и времени.

Несмотря на формальное сходство и историческую связанность, F2 в хорватском функционально отличается от будущего II старославянского: старославянское будущее II формировалось от совершенных глаголов и высказывало завершенность действия перед другим действием, хорватский же F2 большей частью образуется от несовершенных глаголов и обозначает действие, одновременно происходящее с другим действием в будущем.

В связи с F2 в хорватском языке известно наличие своеобразной приставочной глагольной формы настоящего времени несовершенных глаголов с *uz-*, используемой в качестве функциональной альтернативы F2. Форма с префиксом *uz-* (далее, *uz-Vpr*) весьма редка в современном хорватском, но она была неоднократно отмечена в грамматиках прошлых веков. Тексты разных жанров, написанные в 14 - 17 вв., также свидетельствуют, что данная форма нередко употреблялась старыми хорватскими писателями. Все эти материалы указывают, что использование префикса *uz-* в качестве морфологического средства для обозначения будущего отношения является признаком

старого штокавского наречия, на котором формировался стандартный хорватский, а наблюдаемая форма с *uz-* в современном языке представляет собой остаток такого специального употребления префикса *uz-*.

Происхождение формы *uz-Vpr* можно связывать с недостаточным развитием F2, а также с функцией префикса *uz-*.

Различное отношение филологов к F2, обнаруживаемое в старых хорватских грамматиках, говорит о том, что в истории хорватского языка грамматическое значение и синтаксические условия использования данной формы воспринимались носителями языка неоднозначно. В этих обстоятельствах, вероятно, ощущалась потребность в четком средстве выражения будущего действия, относящегося к другому действию в будущем. Именно в связи с этим можно объяснить возникновение формы *uz-Vpr*. Префикс *uz-* (<*vz-) может выражать способ действия ингрессивности, которым маркируется переход от неосуществленности какого-либо действия к его осуществлению. Прагматической импликацией при этом является продолжение того же действие в момент отсчета (*uskipi* = переход от состояния не-кипения к кипению и дальнейшему продолжению состояния кипения). Нетрудно заключить, что глагольная форма настоящего времени с префиксом *uz-* в придаточном предложении стала способна функционировать как средство выражения действия, происходящего после момента высказывания и продолжающегося в момент отсчета в будущем.

В пользу этого толкования можно отметить параллельное употребление префикса *vz-* в старочешском языке. В старочешских текстах, в том числе в самых старых переводах Псалтыря, обнаруживается использование префикса *vz-* для обозначения будущего времени. Употребление ингрессивного способа действия как средства выражение будущего основано на том же когнитивном процессе, при котором глаголы с основой *-čьn- (начать, роčeti, začeti), имеющей инхоативное значение, семантически весьма близкое со значением ингрессивности, использовались в качестве вспомогательных глаголов временных форм сложного будущего в старых славянских языках.

Форма с *vz-* в чешском исчезла на ранней стадии его письменности, а употребление формы *uz-Vpr* в хорватском также подверглось вытеснению и ограничивается отдельными лексическими единицами. Причину таких изменений можно видеть в языковой системе славянских языков, в которых префиксация глагольной основы представляет собой, прежде всего, словообразовательный процесс, а не словоизменительное средство глагола. Так как формы с *vz-* в чешском и *uz-Vpr* в хорватском являются в этом смысле аномальными, они были полностью вытеснены или же подверглись маргинализации.